

地域の人々を見守るかのように佇む

大石の石仏群

〔伊達市霊山町〕



伊達市霊山町にある霊山県立自然公園は、平安初期(859年)、慈覚大師により開山され、以来480年余南奥文化の中心として栄えたと伝わる。また、南北朝期には、南朝の臣北畠顕家が義良親王(後の後村上天皇)を奉じて陸奥の国府を開いたことは史上有名なところである。そんな歴史をふまえてか、霊山町には民間信仰の面影を残すものが数多く点在する。町のいたるところに大小の神社が見受けられ、その大半はあたかも地域で生活を営む人々を見守るかの様に、小さな山の上

や山の中腹に建てられている。

霊山町大石地区には、その名の通り大石・巨岩が多い。しかも、巨石の上に石碑を建てたり、祠をまつったり、石に対する信仰の深さを感じる。霊山神社を右に曲った、その先の大石エリアに入る分かれ道のところにある石仏群は、左から地藏、馬頭観音、南無阿弥陀仏、庚申印、庚申塔、心大己貴命、巳待塔、金比羅大権現、山神宮、山神塔などが並ぶ。その壮観な佇まいは、民間信仰の深さをひしひしと感じさせている。

〔サトイモ(サトイモ科サトイモ属)〕

地下茎を食べるサトイモは山に自生するやまのいも(自然薯)に対し、里で栽培されることからこの名がついた。原産地は、インド東部からインドシナ半島。日本への渡来は、稲作が始まった縄文時代後期より古いとされている。寒さには弱く、東北地方が栽培の北限。



畑のはな 